

フルベール・ユールー初代大統領 ②

フルベール・ユールーは、フランスの植民地だったコンゴを独立に導き初代大統領となった。しかし、彼の功績はコンゴの歴史の舞台から一時期完全に下ろされていた。実際、彼の歴史的評価はさまざまである。そこには政治的な意図があるのだろうが、確かに、彼の生き様や辿った道は、相反することが多いように感じられる。

フランスは彼のことを「excentrique」（突飛な、風変わりな）と形容した。たとえば、もともと司祭（Abbé）であった彼は、教会の反対を押し切って政治の世界に入ったが、生涯にわたってバチカンから禁止されていたスータン（聖職の平服）を着続けた。また、自身の呼称には常に Abbé の称号を付け、宗教性を前面に押し出していた。政治理念として、彼は反共産主義という点では一貫して、その点ではアフリカの共産化を危惧していた西側諸国からは受け入れられていた。しかし、ソ連との結び付きを強化し、フランス共同体の参加にノーと言ったギニアの指導者セクトゥーレとは深い親交があり、コンゴに招くなどした。

当初、ユールーはラリ族出身であることを政治的に利用した。ラリ族の英雄であり救世主として信奉されていたアンドレ・マツワの後継者を自認することによって支持を得て政界に入った。マツワ自身もかつて聖職者であったことから、ユールーの姿はまさに救世主の登場だと思われたのかもしれない。しかしユールーはその後、そのマツワを信奉する人たち（マツワニズム）を弾圧している。

マツワニズムは、植民地政府に対して抵抗運動を展開していた。身分証明のための写真の撮影を拒んだり、子どもたちに学校教育を受けさせなかったりしていた。ユールーはこうしたことを激しく非難した。一方、マツワニズムの急進派のなかには、彼のスータン姿にカトリック教会との関係、つまりは植民地政府との結び付きを感じていた者もいたようだ。また、ラリ族のなかでも、ユールー派に加わらない者には「むち打ち」というビラが配布されたり、彼に投票しない者が殴られる事件なども起こったりした。ラリ族だからといって、彼を支持したというわけではなかった。

またユールー自身も、決して一部族だけを優先するような部族主義者ではなかったようだ。実際、彼が選挙で勝つために、出身のプール県ではなくニアリ（Niari）やクィル（Kuילו）といった地方からの支持を取り付けている。そのなかには、かつて奴隷貿易で繁栄したロアング王国（Loango）との結び付きもあったと言われている。また、彼が政権を握った際には、政敵であったオパング（Opangauld）など北部出身者も閣僚として起用している。

こうした面では部族主義を超えた姿が感じられるのだが、その一方で言語に関しては、彼は部族語であるラリ語を公式の場でも多用した。ブラザヴィルを中心に広がるプール県はラリ族が多く、とくに南部に広がるバコンゴ地区（Bacongo）やマケレケレ地区（Makélékélé）はその中心である。そこにニアリやクィルから来た人たちの多くが住んでいた。したがって、ラリ語は部族を超えた共通語としての性格をも帯びていた。ユールーはこのラリ語を通じて、国としての一つのアイデンティティを創出しようとしていたのではないだろうか。さらに彼は、隣国コンゴの指導者ツォンベ（Tsombé）と協力して、かつてのコンゴ王国の勢力域における広域コンゴ（Kongo）のアイデンティティの再構築を模索していたようでもある。

ユールーは植民地統治下で民主的に選出された大統領ではあるが、就任以降の彼の統治は少しずつ独裁的になっていく。首都へ流入する若者が激増し、それが失業率を押し上げ、彼らの不満が政府へと向けられていくことが影響していたようだ。ユールーはこうした若者が共産主義へと傾倒することを危惧していた。そこで彼は、公共の場所で集会や反政府的な言論を厳しく規制する法律を制定。それが効を奏したのか、1961年3月に行われた選挙では97.56%の得票率で大統領に再任されるのである。圧倒的な数だが、そこには不満分子が押し込まれたということもあったのではないだろうか。さらに1962年6月、憲法を改正し単一政党制を導入する。そして、労働組合にはとくに圧力を加えていった。

翌年の8月13日から15日までの3日間、その労働組合がついに立ち上がった。組合の呼びかけによって、ストライキに突入した。それが後に「les Trois glorieuses」（栄光の3日間）と言われ、政権交代を招いた歴史的出来事となる。国民から辞職を迫られたユールーは、フランスにたすけを求めるのだが断られ、大統領を辞任した。彼の大統領在職期間は3年だった。

辞任と同時にユールーの身柄は拘束され、裁判にかけられることになった。彼のあとに政権に就いたのは、同じプール県出身のアルフォンス・マサンバ - デバ（Alphonse Massamba-Débat）である。それから約1年半後の1965年3月25日、ユールーは国を脱出し隣国に逃亡する。この脱出には、マサンバ - デバが裏で糸を引いていたとも言われている。隣国では同胞のチョンベが彼を支援した。この間、被告人不在のまま、ユールーには死刑判決が下された。彼はその後、フランスに庇護を求めるのだが、フランスはそれを拒否するのだった。司祭という立場でありながら4人の妻を持ち、生涯スータンを脱がなかったユールーはその「excentrique」な行動から信用を失い、フランスに迎えられることはなかった。行くところがない彼に手を差し伸べたのはスペインだった。

マドリッドでの亡命生活で、彼はコンゴへの復帰を画策するのだが、叶うことはなく1972年5月、帰らぬ人となる。一旦はマドリッドで埋葬されたが、人道上の観点から同年11月に遺体は生まれ故郷のマディブ（Madibou）に運ばれ、家族の手で葬られた。

マサンバ - デバが大統領の時代には初代大統領を讃えるような動向があったようだが、それ以降、北部出身者が政権を握ると、国は社会主義へと舵を切り、反共産主義のユールーはコンゴの歴史から消されていった。彼の記憶が再び歴史の舞台に現れるのは1991年のこと。それは、コンゴが西欧の圧力の下で、一党独裁制から民主化へ移行する時期と重なる。現在、ブラザヴィル市庁舎の前には、スータンを着ているユールーの銅像がある。2009年に現大統領が国民的和解の象徴として建設した銅像の一つである。ただし、市役所の隣にあるサヴォルニャン・ド・ブラザ博物館のド・ブラザの銅像と比較するとかなり小さい銅像である。



市役所前にある
ユールー大統領の銅像